

「酒飲みのはなし」

(2012)

お酒が好きでたまらない人が羨ましい、全ての行動が酒に結びついているから、仕事が終わった後ゆっくり美味しい酒が飲める、ゴルフを終えたら冷たいビールを飲もう、そのためには喉が乾いているが他の水分を我慢しよう・・・要するに何をやっても最後には酒と結びつくから、どんな仕事もどんな遊びも楽しく又充実感がある。

「日本全国酒飲み音頭」という歌がある、1月は正月だから酒を飲み・・に始り、豆まき、雛祭り、花見、子供の日、田植え・・で酒が飲め、8月は暑いから、そして台風で、運動会で、遂には、11月は何も無いから酒が飲め、最後に12月はドサクサで酒が飲める・・・本当に羨ましい。この歌には別バージョンもあり、旅をしながら北海道では毛ガニで酒を飲み、秋田ではキリタンポで、そしてサクラランポで、納豆で、お茶で、時には舞妓さんと、越中フンドシをして酒を飲み、黍団子で、伊予カンで、カステラで、そして鹿児島では西郷さんと、最後は沖縄には行つた事がないけど酒が飲める・・・と日本漫遊しながら酒の飲める幸せに浸つている。余り飲めない僕でさえ酒飲みの気持ちは良く判る、かつて煙草を嗜んでいた頃、食事やコーヒーの後の煙草の美味しさが格別で、コーヒーを飲むのはその後に美味しい煙草を吸う為ではないかとさえ錯覚させられた思い出があるからだ。

忘れもしないのは東京本社勤務時代の事だ。折しもバブルの真っ盛り

の時でもあつたし、東京のサラリーマン達は本当に良く飲んでいた、余程の家庭内の不和か、家が狭く身の置き場が無いのか、仕事と通勤のストレスなのか、それとも会社に魂を売ってしまったのか、それとも…実は本当に芯から酒が好きな人達なのか？ 宇部勤務時代は車通勤だった事もあり、又もともと酒に弱いこの僕だったが仕事に関係のある「月に数度」の飲み会だけは何とかこなしていた。

東京本社勤務になつてからはそれどころでは無い…「週に何度か」の頻度での付き合い酒生活となつてしまつた。一杯飲みながらの一見真面目そうな政治談議・経営談義・人事情報が錯綜していた。帰りのタクシー待ちで大勢が長蛇の行列を成していたのを今懐かしく思い出す。幸いにも肝機能を始め他のデータにも異常は全く無く、職場の周りの者達からは好奇の目で見られたものだ。

サラリーマン生活の体験から、仕事の大半は酒を飲んでするものだ…と実感させられた事例が多々ある、曰く幅広い「人脈」作り、「円滑」な事業運営、貴重な「情報」源、…等など、それは良く判つてはいるが酒と本気で付き合えない体なのだからしようがない、夏の一杯のビールの爽快感、寒い時体に染み渡る熱燄…からだが軽くなり爽快感を感じ・何処となく陽気になつてくる。この最初の一杯のあとが僕には大変なのだ、動悸が次第に早くなり、そして顔面が紅潮し始める。他の症状は何か耐えられるがこの顔面の紅潮だけは耐えられない。

酒で赤くなつた他の人の顔程醜いものは無いと思う、人間が馬鹿になつたようだ…酒とはもともとそんなものなのだから理屈で考へてはいけない…とは思つものの、赤くなつた顔だけは絵的にイヤだ…と言うよりは飲めない人が無理して飲んでいるのだ…と思つただけでイヤになる。

酒が飲める、飲めないは能力とか個人差ではなく人種的・遺伝的なものだから。判つてはいても飲めない者は飲めない。もともとは日本人の半分は遺伝的に酒に弱いのだ。参考までにこの酒に弱い人の割合は人種的に言えば、日本人44%、中国人41%、タイ人10%、フィリピン人13%、ヨーロッパ系白人0%、アフリカ系黒人0%、北アメリカインドイアン0~4%と言う事だ。元来人類が誕生した時には例外なく酒に強かつたのだが、数千~2万年前シベリア地方で一人の人間の遺伝子に突然変異が生じ、これが黃色人種（モンゴル系民族）に拡がり、この一部の欠けた遺伝子配列のお蔭で、酵素として働くなくなつてしまい、酒に弱い遺伝体質が東アジアに広がつていつたと言う事だ。一方、同じ日本人でも、縄文人系（日本人の2~3割）は酒に強く、大陸から日本列島に移住してきた弥生人系（7~8割）は弱い型が多いと言われている。

要するにアルコールの分解代謝物質「アセトアルデヒド」を分解する脱水素酵素（ALDH）が少ないので、最終的に炭酸ガスと水にまで分解

することが出来ないのです。しかもこの仕組は遺伝するものだからいくら頑張ってもしょうがないのだ。

但しアセトアルデヒドを分解するのはこの酵素だけではなく、他にはMEOSという酵素でも分解出来、MEOSは鍛えるとその力が強くなるらしいから、飲めない人が練習をしていくうちに飲めるようになるというのもまんざら嘘ではないらしい、但し、MEOSは数週間酒をやめていればもとの状態に戻るし、MEOSを使い過ぎると肝障害を起こしやすくなるので、もともと飲めない人が飲めるようになったというのは、体にとっては危険なことのようです。

世の喧騒を見てみると、日本人の半分が飲めないというのはどうも信じられない、日本中が酒を飲んでいるように思われる。ひょっとして肝臓を犠牲にしながら酒の虜になつて飲んでいる人が多いということなのだろうか。

醉うほどに発句飛び交う箸袋
年忘れ血糖値のこと佳境なり
肩書きの無き友となり冷やし酒
酒匂う夜中の電話 雪女郎

雪しんしん 酔いし女の理屈聞く

冬ざれや　主は来ませりと歌いなむ

スナックは聖夜の歌で鎮まりぬ

何処からが天の國　雪しまく街
香水と酒にまみれて年送る

ブランデー飲んで愛して春の果て

クリスマス　酔いし女に生返事

女酔い　男は酔えぬ夜の秋

ワイン飲み　愛をせがみて初時雨

深酒す　女の性さがや年果さがつる

香水の名残りもありて冬酒場

アルコールは、体内に入ると大部分が「アセトアルドヒド」という物質になり、さらに酢酸を経て、二酸化炭素と水になって無毒化されます。

悪酔いはこの「アセトアルドヒド」が分解されずに体内に残ることで起ります。

アセトアルドヒドを分解するのは、ALDHという酵素で、一と一の一つがあります。

この酵素の有無や働きの強い・弱いは個人差ではなく、人種差によるところが大きいとされています。

日本人は「弥生人系」と「縄文人系」に分かれますが、「弥生人系」のほうだけの異変が出て、現在の日本人の44%に相当するといわれています。